

4) 鳥の目と虫の目で取り組む Antimicrobial Stewardship

¹ 東北大学大学院 医学系研究科 感染症診療地域連携講座○具 芳明¹

薬剤耐性菌の世界的な増加は健康上の大きな脅威となっている。WHO は 2011 年の世界保健デーのテーマを薬剤耐性菌とし、薬剤耐性菌を公衆衛生上の問題ととらえる姿勢を鮮明にした。Antimicrobial stewardship は WHO の挙げる重要課題のひとつとされている。私たちはこの問題を地域あるいは国際的な広がりのある問題として捉え、医療施設のみならず、地域に視野を広げて取り組みを進めていく必要がある。

Antimicrobial stewardship の大きな目的は、抗菌薬治療において、臨床的に最大の効果を得ながらも副作用を最小限におさえ、かつ薬剤耐性菌を惹起する選択圧を最小限にすることにある。そのための「仕掛け」が Antimicrobial stewardship であるとも言え、この中には抗菌薬の適正な使用（選択、投与量、投与期間、投与経路）をサポートするさまざまな手法が含まれてくる。しかしながら、その目的を突き詰めると、結局は個々の感染症患者をきちんと診断し適切な抗菌薬を用いて治療することに尽きる。その積み重ねが未来の患者（それは私たち自身かもしれない）を治療するのに必要な抗菌薬を手元に残すことにつながるはずである。東北大学病院では抗菌薬適正使用を進めるためのさまざまな仕組みに加え、血液培養陽性例や多剤耐性菌検出例をすかさずキャッチし、個別に状況を把握して主治医にアドバイスする形の検査部発信型診療支援を行ってきた。これを継続的に行ってきたことで院内での認知度は高くなり、院内の感染症診療全体への波及効果が生まれていると自負している。

検査結果に基づいて発信する形の診療支援システムは、臨床的に重要な症例を比較的効率よく拾い上げることが可能ではあるが、結果的に介入のタイミングが遅くなりがちである。Antimicrobial stewardship の観点からはもっと早く介入・診療支援を行う必要があったと感じる症例が多いのも事実である。感染症かどうかの診断に迷う症例や、病態に基いて適切な empiric therapy を選択する段階の症例についても、より積極的にコンサルテーションを受け、これまで以上にベッドサイドで診療に関わっていくことが今後の課題である。そのためには、私たち自身の感染症診療のレベルアップを図るとともに、他科医師、看護師、薬剤師など多職種の間を深めて多角的に取り組んでいくことが求められる。

これらに加え、私たちは地域の医療機関に対して感染症診療のレベル向上を目指した支援も行っている。具体的にはとくに研修医を対象とした教育活動や個別の症例コンサルテーションである。ほとんどすべての医師が何らかの形で感染症を診療しているにも関わらず、臨床感染症の教育はまだ十分とは言えない。とくに医師キャリアの初期に感染症診療の基本的な考え方を理解し実践することは、Antimicrobial stewardship の観点からも必須と言える。

当日は、広い視野をもって取り組む鳥の目と、個々の症例に丁寧に対応する虫の目の両方を意識しながら活動を進めることの重要性について、私たちの取り組みの一部を紹介しながら考えてみたい。